

オーストラリアキチヌ（仮称）の種苗生産

仲村 伸次・勝俣 亜生^{*1}・藤本 裕・大城竹広^{*2}

1. 方法 1995年12月25日に海面小割生簀で飼育中の親魚52尾(1.2~2.5Kg)を陸上30t親魚水槽に移した。産卵が見られないので、1996年2月20日にゴナトロピン500IU/kgの筋肉注射を全尾に行った。3~4日後に275gの浮上卵が得られたので50t飼育水槽に収容し、飼育を開始した。

餌料はワムシ→アルテミア→配合飼料を原則とした。ワムシは、L型ワムシでスタートし以後はS型・L型を投与した。栄養強化は、ナンノクロロブシス+ドコサユーグレナを使用した。配合飼料は日令15日、全長5mmをめどに投与を開始した。

2. 結果

親魚はその後、産卵が見られないので、3月3日に11尾(♂8・雄雌不明魚4)を別水槽に移し、雄雌不明魚のみにゴナトロピンを注射した(1,000IU/kg)が卵は得られ

なかった。3月3日には、雄雌不明魚4尾をゴナトロピンを注射した(1,000IU/kg)ほかの雄雌不明魚4尾と交換をした。さらに3月20日には、14尾(♂3・雄雌不明魚11尾)の♂2尾と雄雌不明魚全尾にゴナトロピンを注射した(1,000IU/kg)。3月3日と3月20日の注射の後2~3日後には少量の卵は得られるものの、種苗生産を行える量の卵ではなかった。また収容した卵も、未受精が多く、ふ化した数は2万程度であった。

種苗生産は日令59でいったん取り上げ、その後は6t水槽に移し飼育を続け、出荷数は4千尾であった。

今回使用した親魚の内8尾は、腹を軽く押すと精子がでる状態であり、十分成熟していたと思われる。卵の得られなかった原因としては、雌の未成熟、太り過ぎ、栄養剤の投与不足等の原因があげられる。次年度に向け天然親魚の確保、養成親魚の飼育方法の改善等が必要である。

表1 平成8年度 オーストラリアキチヌ種苗生産結果

生産回次	回	1
卵収容日	日	2月23日~25日
卵収容数	千粒	495
ふ化日	月日	2月26日
ふ化率	%	4.0
開始時水槽	m ³ ,槽	45,1
仔魚収容数	千尾	20
開始密度	千尾/m ³	0.4
飼育日数	日間	76
取揚全長範囲	mm	—
取揚平均全長	mm	20
取揚尾数	千尾	4
生残率(ふ化から)	%	20
分槽時全長	mm	15
使用水槽総数	m ³ ,槽	6,1
取揚密度	千尾/m ³	0.67
飼育水温	℃	16.3~23.9

*1 現在、水産振興課

*2 臨任職員